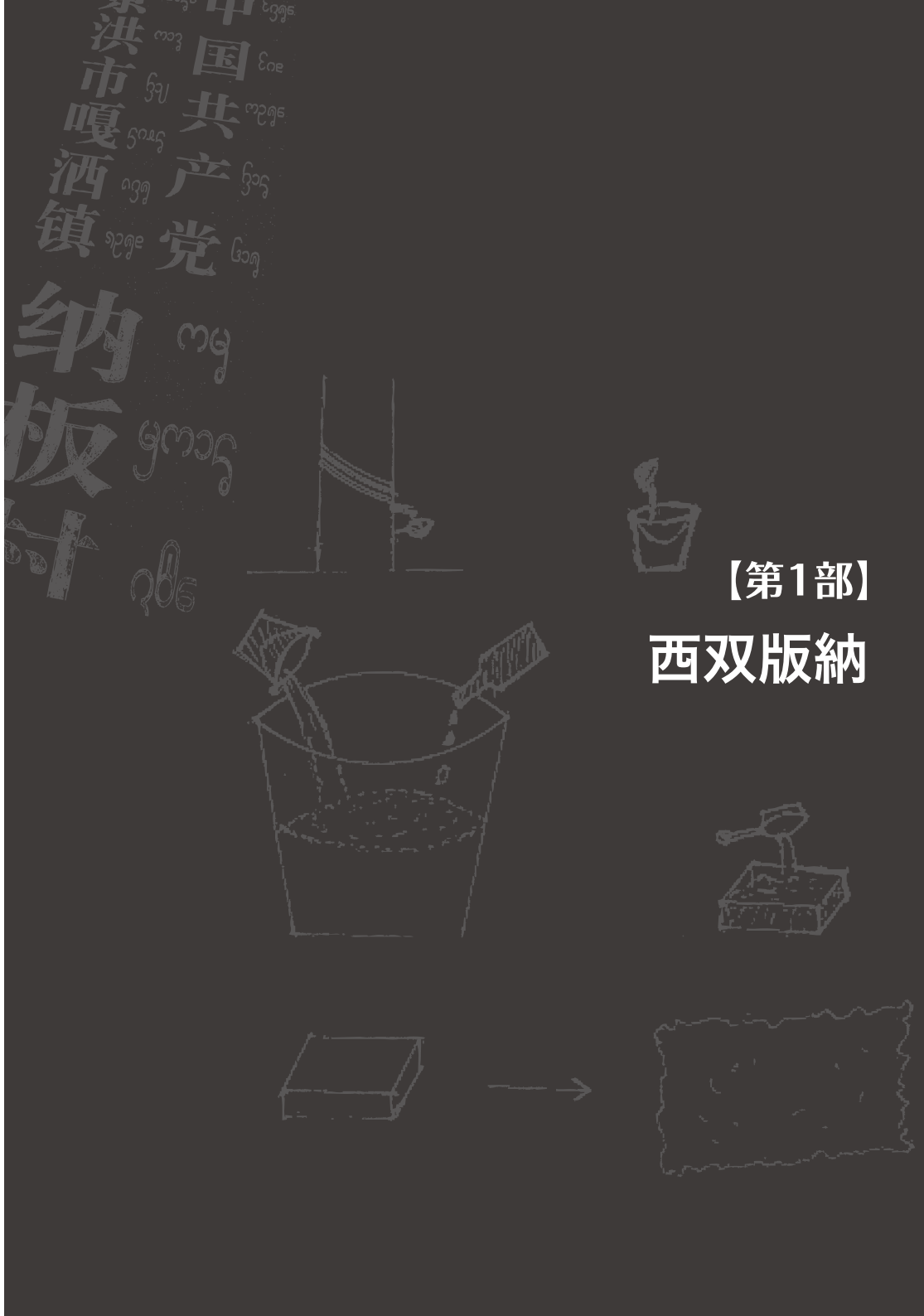
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	西双版納について
Author(s)	思, 沁夫
Citation	GLOCOLブックレット. 2013, 11, p. 7-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48338
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka



【第1部】

西双版納

西双版納について

思沁夫 大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授

1.「西双版納（シサンバンナ）」[1]と「瀾沧江（メコン）」[2]

中国では、しばしば「中国の多様性は雲南に集中し、雲南の多様性は西双版納の亜熱帯雨林にある」と表現される。ここでいう「多様性」とは、以下の2つの意味として考えたい。自然環境・生態の多様性と文化、あるいは民族の多様性である。この2つの多様性は、雲南という場所で偶然生まれたのではなく、互いに影響し合い、密接な関連性を持っている。つまり、自然環境の多様性は文化の多様性の基盤であり、各民族はこの多様性に応じ、其々の生業や文化を構築したと考えられる。

西双版納傣族自治州[3]（以下、「西双版納」と略す）は、雲南省の南端に位置し、ミャンマー、ラオスと国境を接している。総面積は1万9700平方キロメートルである。西双版納は、西蔵高原の東南端に位置し、山地が陸地面積の大半を占める。これら

1　「西双版納」の正式名称は、雲南省西双版納傣族自治州（Xishuangbanna Dai Autonomous Prefecture）であり、1953年1月24日に設立された傣族の自治地方である。
　「西双版納」はタイ語である。「西双」はタイ語で12という意味で、「版納」は千亩という納税単位＝地域を指す。

2　中国語では、メコン川を異なる2つの名称で現す。中国領内に流れるメコン川を「瀾沧江」といい、中国とラオスの国境を越え、東南アジアの国々に流れるメコン川を「湄公河」（Mekong River）、つまり「メコン」と呼んでいる。しかし、本冊においては、中国領内において「メコン川」という表現を用いる。

3　中国では民族政策上、すべての民族は「漢族」、あるいは「少数民族」に分類される。少数民族は、人口規模に応じ“自治地方”を作ることができる。自治地方は「自治区」、「自治州」、「自治県（旗）」と「自治郷」と4つの形態があり、それぞれ中国の行政システムである「省」、「地方（あるいは県を持っている市）」、「県」と「郷」に相当する。ちなみに、雲南省は「自治地方」、つまり「自治区」ではないが、多くの少数民族が暮らしているため、省以下の「自治地方」は多く保有している。

の山々は、メコン川やメコン川に注ぐ大小多くの河によって削り取られたため、山間には、深い谷が形成されている。特に、メコン川流域に渓谷と盆地が多く分布している。これらの渓谷は、地域の人々が農業や生活を維持する上で非常に重要である。そのため、地域の歴史と文化を「（メコン）渓谷文化」と呼ぶ研究者もいる[4]。また、渓谷文化であるがゆえに、地域において標高が大きな意味を持つとも考えられる。実際、標高に順じ、様々な生業が形成され、ひとつの渓谷の中にも多様な文化、生活が見られる。例えば、今回調査にした納板河流域国立自然保護区（以下、「納板保護区」と略す）は総面積が266平方キロメートルで33村あるが、そのうち8割以上が納板河渓谷と曼点河渓谷に分布し、標高の低いところから高い順に傣（タイ）族、布朗（ブラン）族、哈尼（ハニ）族と拉祜（ラフ）族が同じ渓谷に生活している。

メコン川は、チベット高原（行政的には、青海省玉树藏族自治州雑多県）を水源として始まり、青海省と西蔵自治区の東部高山地域を流れ、さらに雲南省を北から南へ横断し、西双版納の勐腊県で国境（ラオスとミャンマー）を越え、国際河川となる。メコン川及びその水系は、地域に生活用水や農業用水を供給しているだけではなく、交通網として、また気候や自然環境の調整役として、様々な役割を果たしている[5]。また、川魚は、地域の食文化を理解する上で非常に重要な存在である。地域において、漁業だけに専念した民族、あるいは集団はあまり見られないが、（利用法は様々であるが）川魚を食文化に取り入れなかった民族はほとんどいないと考えられる。しかし、水力発電のため、メコン川流域に多くのダムが建設され、メコン川流域の環境は勿論、地域の人々の生活、生業にも大きな影響を与えている[6]。またよく知られているように、メコン川は国際河川であるため、中国と中国以外の国々との間で様々な問題も生じている。

西双版納は、中国では唯一亜熱帯気候帯に属する地域である。年間降雨量が1300㎜を超え、1年を通じ平均気温が21℃以上である。西双版納の気候を見ると、太平洋の影響もあるが、インド洋から来るモンスーン（季節風）の影響が大きいと言える。例

4　趙亮氏が指す「渓谷文化」はより広い地域を含む。詳しくは、趙亮（1990）を参照。
5　詳しくは蘇宇芳（2009）を参照。
6　詳しくは蘇宇芳（2009）を参照。

写真1：村人にとって欠かせない竹と水牛もプラスチックと自動車にかわりつつある

写真2：昆明の新空港

えば、毎年5月～10月下旬にかけ、モンスーンにより雨が多い季節、つまり雨季となり、10月下旬～次年の5月までは、モンスーンの勢力が弱まるため、雨がほとんど降らなくなり、乾季となる。雨季の降雨量が年間降雨量の8割以上を占めることから、地域の気候、自然環境にとって、モンスーンの影響がいかに大きいかが容易に想像できるだろう。

中国熱帯植物園（自然科学院）の調査研究によると、西双版納には2万種以上（そのうち熱帯植物が5000種を超える）の植物が生息し、そのうち食用植物が1万種以上あり、果物が50種以上もある。また、西双版納には、429種の鳥（中国全国に分布する鳥の3分の2を占める）、67種以上の哺乳類（中国全国に生息する哺乳類の16%を占める）が生息しており、アジアゾウ、インドシナトラ、インド野牛、雲南蘇鉄、大葉木蘭、桫欏など多くの希少動植物が保護対象となっている。

また、西双版納は農業を中心とする地域であり、農業人口が75万人（2007年）を超える。特に西双版納の各民族は、海抜500メートルから2000メートルを超える山の斜面を利用し、水稲、旱稲、トウモロコシ、茶、豆類、イモ類など様々な作物を作り、多様な生業、居住形態、服装や食文化などを維持してきた[7]。

西双版納は景洪市（西双版納の政治・行政の中心地）、勐海県、勐腊県と11の国営農場（その殆どが1950年代～1970年代に設立）

7　雲南の南部地域は照葉樹林文化発祥の地と言われている。詳しくは、上山春平（2009）を参照。
　ここで注意して頂きたいのは、地域で栽培される作物が大きく変化している点である。稲や茶などを除き、多くは「外部」から入ったものである。

から構成され、総人口は107万人(2007年)である。西双版納には、傣を始め、ハニ、ラフ、ブラン、基诺(ジノ)など13以上の少数民族が共生しており、少数民族の総人口が81万人で、西双版納総人口の74%を占める。また、これらの少数民族の多くは、ミャンマーやタイ、ラオスなどに同族が存在する。中国では、国境を跨ぎ、生活する民族を「跨境民族」と呼ぶ。改革開放後、中国が周辺諸国との貿易、交流が活発化するなかで、「跨境民族」の注目度は高まった。

2. 納板河流域国立自然保護区

今回の調査地である納板保護区は、景洪市から北に26キロメートル(メコン川を利用すれば16キロメートル)離れた納板河沿いに位置する(図1参照)。納板河は全長24キロメートル、メ

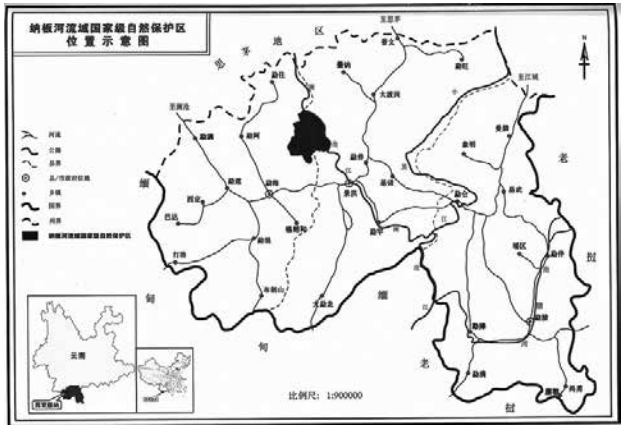


図1：西双版納における調査地図

コン川に注ぐ河である。納板保護区は、景洪市(嘎洒镇)と勐海県(勐宋鄉)の境目にあり、土地の大半は山地で、平均海抜は800メートル以上である。納板保護区の西南に聳え立つ拉祜玛(ラグマ)山は、海抜2304メートルで、保護区内で最も高い山である。

保護区の総面積は266平方キロメートルである。保護区には33の村、傣、ハニ、ブラン、ラフなど6つの民族5916人(2010年)が暮らしている(図2参照)。

納板保護区は、1991年「小河流域生物圏(系)」の保護、つ

図2：調査地における33村の分布図

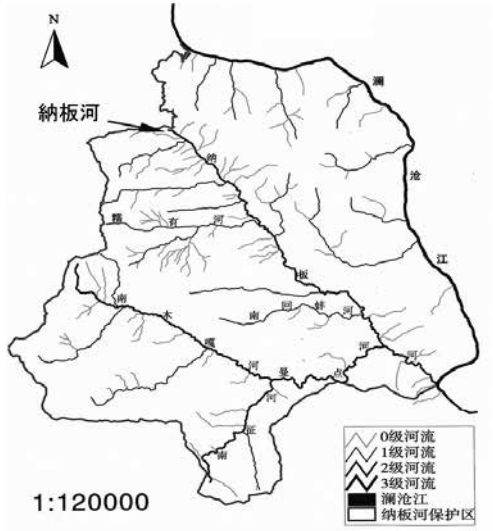


図3：納板下流域図

写真3：着用する人が減っている少数民族の衣装

まり従来の希少動植物を目的にした保護と異なり、ひとつの生態系[8]全体を保護する自然保護理念に基づき、雲南省の自然保護区(森林型)として設立されたが、保護理念–保護活動における地域住民の参加と保護活動の実績が評価され、2000年に「国立自然保護区」となった。

行政管理上、納板保護区は雲南省環境保護局に属する。納板保護区は、保護部門、研究部門と地域連携部門という3つの部門から構成され、定員は30名である。また、納板保護区に暮らす村民から18名を「森林保護員」として雇用している。

これまでの調査研究によると、納板保護区から西双版納に生息する8種類の亜熱帯植物が発見され、そのうち「国家重点保護植物」リストに掲載されている植物が20種以上ある。また、インド野牛(*bos gaurus*)、大型リス(*ratufa bicolor*)など「国家重点保護動物」だけで68種以上が登録されている。

しかし、納板保護区の特徴は、生態系全体の保護だけでなく、地域住民を移転させない、地域住民の保護にある。納板

8　より正確には2つの部分から構成されている。納板河流域とメコン川と納板河間にある安麻山分水嶺である(図3参照)。

保護区は、以下のように保護活動の特徴をまとめている。①納板河流域の生態環境を保護の対象にする；②保護区域内に暮らす人々の土地に関する所有関係は従来と同様であり（変更はしない）、移転もしない。住民の生活、文化も保護する；③保護、研究と教育を一体化させる。

地域住民が保護に直接参加する保護区（モデル）は、中国では「社区共管」と呼んでいる。「社区共管」は英語のCommunity Co-managementの中国語訳で、1990年代以降、国際社会の影響と協力によって広められた概念（理念）である。「社区共管」とは、保護地域の住民と保護理念を共有、理解を促進し、保護と地域住民の生活改善を両立させ、保護活動に地域の住民を参加させ、保護組織と保護地域の住民が共にあるいは彼らの協力を得て、保護目標を実現させることである[9]。

3.「保護」と「開発」

中国政府の公表した数字によると、中国（香港、マカオ、台湾を除く）は2011年末までに合計2640ヵ所の自然保護区を設立し、総面積は149万平方キロメートルに達した。自然保護区の面積は国土面積の14.93%を占める。中国において、雲南省は、保護区の数が最も多い地域のひとつである。

中国では、1953年に最初の「自然保護区」が設立されたが、1990年代まで自然保護区の概念（理念）も実践もほとんど知られていなかった。1980年代以降、中国政府は社会主義原則を堅持しつつ、市場経済を導入した。また、経済を発展させるため「古い観念」や「保守思想」の転換が必要であり、政策上、制度上、豊かになることや消費することを奨励し、都市から農村まで、全国的に「意識改革＝“農民意識から市場意識へ”」を推進した。さらに、先進国の資本と技術を利用するための優遇策（例えば「特区」の設立や沿海都市の開放など）を講じ、また貿易を「国策」として拡大させた。いわゆる「改革開放」政策の実施は経済成長を

9　「社区共管」のモデルとして以下の事例がある。1994年の「貴州草海保護区-社区共管の試み」、1995年の世界銀行のGEFプロジェクトなどである。また、雲南省では、1998年の中国政府とオランダ政府の「森林保護と地域発展」プロジェクトやWWFの「白馬雪山における社区共管」プロジェクトなどがある。

はじめ、中国社会を大きく変化させた。一方、環境問題をはじめ、変化の「負」の側面も顕著になり、開発と同時に保護が緊急課題として浮上し、人々の関心も高まった。

自然保護の思想と実践は、アメリカやヨーロッパで生まれ、植民地や国際機関などを通じ広がったと考えられる。特に1960年以降、「公害」問題や「資源枯渇」問題は、先進国を中心に世界に大きなインパクトと影響を与えた[10]。このような状況下で、自然界、生態系の保護、持続可能な資源利用が国際社会の関心事となり、政治、文化や教育との結びつきを急速に強めていた。「自然保護区」という概念や「自然保護区」設定の動きは、少なくとも19世紀からアメリカやヨーロッパで出現したが、この概念が世界中に拡大し、自然保護区の指定増加は、20世紀後半以降である。

保護という考え方は広く普及したとはいえ、保護をどのように理解し、実践してゆくのかは国や地域により大きく異なる。また、自然保護区は先進国や開発途上国を問わず、設定されるようになったが、その規模や形態は様々であり、そもそも自然保護区の定義も統一されていないのが現状である。

国際自然保護連合（IUCN）は、「保護地域」を「生物多様性及び自然資源や関連した文化的資源の保護を目的として、法的に若しくは他の効果的手法により管理される、陸域または海域」と定義している。また、保護地域を6つのカテゴリーに分類している[11]。

また、世界遺産委員会は、人類が共有すべき「顕著な普遍的価値（Outstanding Universal Value）」がある自然環境（生態系）を各国の政府や地域社会は積極的に保護すべきであり、各国政府の申請に応じて「世界遺産」リストに登録し、文化遺産と並んで自然遺産も保護することを主張している[12]。世界遺産リストに登録されることが観光業にとっては非常にメリットが高いため、1990年代以降、登録申請と同時に登録数も急増している。世界遺産登録制度を通じ、環境保護意識が高まり、自然環境（保護区）が守られたという報告がある一方、「世界遺産」となり、観光客の増加で自然環境が破壊される事例も数多く報告され、また保護と地域住民との対立、紛争も多発しているという指摘も多い。

10　特にレイチェル・カーソンの『沈黙の春』やローマ・クラブ「人類の危機」レポートの『成長の限界』は、全世界に影響を与えた作品として有名であり、環境保護や環境思想を専攻するものだけではなく、様々な視点や目的から現在でも広く読まれている。

既述したように、保護はアメリカ、ヨーロッパ起源の考え方であり、開発（自然を支配し、人類のために用いる）も、保護も人間中心主義的な思想が根底にある。

中国においては、グローバル化の影響もあるが、中国が直面する深刻な環境問題は無視できない。例えば、西双版納には多くの保護区が存在するが、西双版納が抱える環境問題も深刻である。西双版納の環境問題は大きく以下の2つに分類できる。生態系の破壊と水源の汚染である。既に指摘したように、世界的に見ても、西双版納は生物多様性が非常に豊かな地域である。しかし、生物多様性は、ゴムやバナナなどの栽培地の拡大、不動産開発（市や町の拡大）や道路建設などによって急速に失われつつあり、農薬などの化学物質を含む水や生活用水がほとんど未処理のまま河などに放流されるため、水源が汚染され、人間の健康問題を含めた被害が数多く報告されている。

今回の調査地である納板保護区も例外ではない。1950年代まで現在の納板保護区地域に暮らす各民族は、基本的に自給自足的な生活を送っていた。傣族は、海抜の低い河沿いなどの地域で耕起し、村周辺の植物（100種以上）を利用したり、川魚やエビなどを捕獲しながら生計を立てていた。ラフ族は、海抜高い地域において狩猟、「旱稲＝陸稲」や村周辺に生息する植物（60種以上）などを利用して生活していた。傣族とラフ族との中間で生活するハニ族は、茶を多く栽培し、茶を自家消費するだけでなく交易にも利用していた。また、トウモロコシなども栽培していた。当時、民族間で作物交換以外に労働交換も行われていた。

11　国際自然保護連合（IUCN, International Union for Conservation of Nature and Natural Resources）は、1948年に創設された、国際的な自然保護団体である。国家、政府機関、NGOなどを会員とする。本部はスイスのグランにある。

カテゴリー1	厳正保護地域/原生自然地域	学術研究若しくは原生自然の保護を主目的として管理される保護地域
カテゴリー2	国立公園	生態系の保護とレクリエーションを主目的として管理される地域
カテゴリー3	天然記念物	特別な自然現象の保護を主目的として管理される地域
カテゴリー4	種と生息地管理地域	管理を加えることによる保全を主目的として管理される地域
カテゴリー5	景観保護地域	景観の保護とレクリエーションを主目的として管理される地域
カテゴリー6	資源保護地域	自然の生態系の持続可能利用を主目的として管理される地域

出典：この表はIUCNホームページのデータに基づき、作成した。詳しくは、http://www.iucn.jp/protection/reserve/reserve.htmを参照。

12　「世界遺産」は、1972年のユネスコ総会で採択された「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」（世界遺産条約）に基づき世界遺産リストに登録された、遺跡、景観、自然など、人類が共有すべき「顕著な普遍的価値（Outstanding Universal Value）」をもつ物件を指し、移動が不可能な不動産やそれに準ずるものが対象となっている。世界遺産は、顕著な普遍的価値を持つものとして、以下の3つのカテゴリーに分類している。①文化遺産（建築物や遺跡など）、②自然遺産（地形や生物、景観など）、③複合遺産（文化と自然の両方について、顕著な普遍的価値を兼ね備えるもの）である。詳しくは、http://whc.unesco.org/en/decisionsを参照。

写真5：ゴムの広がりで、山頂まで農地開拓されている

写真6：調査でお世話になった人達（左2人）と

しかし、1960年代以降、納板保護区と景洪の間に巨大なゴム農場が建設され、多くの外来人口が流入してきたと言われる。現在、地域の総人口の過半数は1960年代以降に移住した人々である。人口増加は、山林を切り開き、農地を生み、また、ゴム栽培技術を地域に持ち込んだ。特に1990年代以降、ゴムの需要が高まり、値段が高騰するやいなや、ゴムを栽培する農家が増え、自然林はゴム林に取って代わられた。1982年の土地制度の改革も追い風となったと考えられる[13]。

1980年代以降、地域の自然林は農民が様々な経済作物を栽培する目的で開墾したことにより急速に減少した。特に、ゴム林の拡大による影響は大きい。例えば、1991年のゴム林の面積は169hm²から、2002年には712hm²までに拡大した（写真5）。11年間で4.2倍も増加したのである[14]。ゴム林の拡大は、生態環境の変化を加速させるだけではなく、人々の自然利用も単純化させて

13　詳しくは納板河流域国立自然保護区（編）（2010）を参照。
14　詳しくは納板河流域国立自然保護区（編）（2010）を参照。

しまっている。近年、ゴム栽培だけで生計を立てる農家が増えている。彼らは、自分たちが消費する野菜、果物や肉などをすべて市場に依存し、購入するようになった。

地域社会がどのように変化し、どのような課題に直面しているのか。学生たちが現地調査を通じて報告する（写真6）。

参考文献

上山春平（編）
2009　『照葉樹林文化』（中公新書：201）、中央公論新社。
レイチェル・カーソン
2011　『沈黙の春』青樹簗一訳、新潮文庫。
D・Hメドウズ、D・Lメドウズほか
2003　『成長の限界』大来佐武郎監訳、ダイヤモンド社。
納板河流域国立自然保護区（編）
2010　『西双版納：納板河流域国立自然保護区と地域社会との連携の理論と実践』中国農業大学出版社（原文は中国語）。
趙亮
1990　『瀾沧江（メコン）渓谷文化論』内部出版（雲南省林業局、原文は中国語）。
蘇宇芳
2009　「メコンの生態と環境問題」、山地生態システム研究センター（編）『メコン水系と環境に関する調査報告』（原文は中国語）。